

そ はくげき あ み ぼうしうご ふうか むし おすじょうふう
夫れ白鷺の相い視るや、眸子運かさずして風化し、虫は、雄上風に
な めすかふう おう ふうか るい おの しゆう な ゆえ ふうか
鳴き雌下風に応じて風化す。類は自ずから雌雄を為す、故に風化
するなり。性は易うべからず、命は變うべからず、時は止むべから
ず、道は壅ぐべからず。苟くも道を得れば、自るとして可ならざる
はなく、焉れを失えば、自るとして可なるはなしと。

【大体の意味内容】

そもそも白鷺という水鳥が雌雄で見つめあうと、眸を凝らすことによって、それで感じあ
い、身ごもることになる。虫は、雄が風上で鳴くと雌が風下で応えて、それで感じあい身
ごもることになる。同類のものは自然と雌雄を為し、花粉が風に乗って受粉するようにし
て、新しい生命を宿すのだ。自然の性は移しかえることはできない。天命は変えるこ
とができない。時の流れは引き止められない。道が伸びてゆくのを塞ぎ止めることはでき
ない。もしもこの道のはたらきを体得できたなら、どんな場合にも万事うまくいく。しか
し、それを手放してしまうと、どんな場合にもうまくいかないのだ。

ギリシャ神話ですと、最高神ゼウスが白鳥などに変身して美女に近づき、結婚してしまう物語
が多いですが、日本の昔話や伝説には、女性が太陽の光そのものに感精して子どもを宿すといっ
たストーリーが多いです。豊臣秀吉などは、母親が夢で、太陽を呑みこんでしまって、それで実
際に妊娠し、生まれた。だから「日吉丸」と名付けられた、そういう伝説を持っています。

この『莊子』に限らず、世界共通で、異種類の間で婚姻するストーリーが成り立つ場合は必
ず、どちらかがどちらかの姿に変化して、同類の間での結びつく、という形を取ります。日本で

